

ヒアリングから運用までの全工程を一気通貫でサービス提供するAI事業専門の開発センターを設立

「先端ITテクノロジーで日本の明日に新たな価値を提供する」との思いから、AI事業に乗り出すジャパニアス。

目指すは、機械設計・電気設計・ソフトウェア・インフラの各領域で

AIを活用する「ハイブリッドAIエンジニア」の育成だ。

2020年5月に開設された、AI事業の拠点となる品川開発センターのセンター長 木村俊之氏と、

AIソリューション課の権藤聖也氏に、センターが担うミッションや今後の展開について、話を聞いた。

——品川開発センターの概要についてお聞かせください。

木村 品川開発センターはジャパニアスの開発拠点の1つとして、2020年5月にオープンしました。メンバーは現在20人で、21年3月には30人規模に拡大することを目指し、中途採用にも積極的に取り組んでいます。このほか、大学教授などのAIスペシャリストと顧問契約を結んで、アドバイザーなどをお願いして

います。

主な事業領域は、AIとクラウド/ネットワークです。デジタルトランスフォーメーションに欠かせない要素だからです。

強みとしては、20年間で培ったジャパニアスのノウハウや経験を生かしつつ、AIシステムに関する一連のサービスを、一気通貫で提供することを目指しています。顧客へのヒアリングからクラウド基盤の構築、CRMを中心としたフレームワーク設計、稼働後のメンテナンスに至る全プロセスをカバーできる体制構築を進めております。

——一気通貫でサービス提供する構想を教えてください。

木村 AIのサービスは「コンサルティングサービス」、「開発などのエンジニアリングサービス」、「教育サービス」の3種類に大別できます。

品川開発センターのロードマップとしては、21期(19年12月-20年11月)は、アノテーションやデータ作成、22期にはライブラリ化とモデル開発、23期に検証用のPoC環境を開発センター内に構築、24期に上流工程からの一気通貫体制を確立し、25期には自社開発したものをライブラリ化するなど、世の中の誰もが簡単に使える仕組みをご提供したいと考えています。

——AIはどのような業務で役に立つのですか。

木村 AIを適用できる領域は非常に広いと考えていますが、当面、われわれは「金融」、「製造」、「社会インフラ」、「自動車」、「健康・医療」、「自然言語処理」の6つの業務領域をAI事業のターゲットに据えています。

金融ではFinTech、製造では故障予知や需要予測にAIが役立ちます。社会インフラでは設備や構造物の老朽化診断、自動車では自動運転への応用が始まっています。これらの分野の一部については、業務の知識と経験を持つエンジニアが在籍しています。そのため、早期に対応できる準備が整っております。

6つの領域でAI適用 画像解析など成果の大きな案件も

——アノテーションやデータの前処理などの分野での成果はいかがですか。

木村 自然言語処理については、人と会話できるロボットのためのAIを開発しています。ほかには、自動車メーカーの案件で画像解析に携わっています。

画像解析のもう1つの適用領域としては、ドローンで撮影した動画による風力発電設備の老朽化診断があります。人による作業では2日ほどかかっていた診断

作業が、AIにより3時間程度で完了しますから、導入効果も確認できました。

変わったところでは、LTEや5Gなどの移動体通信の電波強度を測定して、遮へい物の影響をAIで評価するプロジェクトに関わっています。

——AI教育の状況はいかがですか。

木村 当社のエンジニアは外部のセミナー企業で、JavaやPythonなどの講師をしています。もちろん、社内向けのAI教育研修も進めています。G検定(日本ディープラーニング協会)や、統計検定、Python試験など、AIに関する資格試験の受験を推奨する制度も設けており、新卒を始め、皆、目標を持って取り組んでいます。

データ前処理から稼働後保守まで AIエンジニアは多様な役割を担当

——多様な案件をこなしていくAIエンジニアは、役割分担があるのですか。

権藤 AIと一言でいっても、内容は多岐にわたります。AIエンジニアと呼ばれる人は「コンサルタント」、「データエンジニア」、「データアナリスト」の3つの役割を指すことが一般的です。

コンサルタントは、お客様の課題を聞き出して、その課題をAIで解決できるかどうかを判断するのが役目です。デー



ジャパニアス株式会社
品川開発センター AIソリューション課
権藤 聖也氏 Gondo Seiya



「金融」、「製造」、「社会インフラ」、「自動車」、「健康・医療」、「自然言語処理」の6つの領域を、AI事業のターゲットに据えている

タエンジニアは、学習データをクレンジングしたり、アノテーションといった前処理を担当します。その後、データアナリストがデータを分析して特徴をつかみ、モデルとして作り上げていきます。

さらに当社では、運用段階でのメンテナンスを担当する人もAIエンジニアに位置付けています。一般のITシステムはバグさえなければ長期間品質を保つことができますが、AIシステムでは対象となるデータの質が変わっていくにつれて、認識の精度が落ちることが多くなります。そのため、稼働後も常に精度をモニタリングし、必要に応じてデータの再分析とモデル変更をする必要があると考えています。

——品川開発センターでは、AIエンジニアはどのような働き方をしていますか。

権藤 仕事の基本的な進め方は、一般的なソフトウェア開発プロジェクトと変わりません。当社はテレワークを取り入れていますので、仮想オフィスツールを使ってプロジェクトの状況をチームで共有し、必要に応じてビジネスチャットでコミュニケーションを図る——というのが普段の仕事の進め方です。

データアナリストは、国内外で発表される数多くの論文を読み、アルゴリズムを検証する作業がメインになりますので、

研究者のような働き方もいえます。

当事者意識を持ってもらうために 営業職向けのAI研修を実施

——営業職にもAI研修を行っているそうですね。

権藤 私は社内AI研修の担当者でもあります。最近も全4回の基礎セミナーを全社の営業職向けに実施しました。

AI事業を推し進めていくためには、「当社にはこのようなAI技術があります」と提案していかなければなりません。そのため、営業職も自分事として当事者意識を持ち、AIを理解するべきです。じきに、「AIができない会社には発注できない」という顧客が生まれてくるでしょう。

——良いAIエンジニアになるには、どのような資質があるとよいのでしょうか。

権藤 意外に思われることも多いのですが、まずは英語力。先端分野は英語で発表される論文を読みこなす力が必要です。内容をいち早く評価してビジネスに生かすためには、英語力が欠かせません。

統計学の知識も重要です。当社ではAI事業に配属される新人に、統計検定2級の資格取得を義務付けています。

AIを融合させたプロジェクトは、今後ますます増えていきます。私たちはいつでも参画できる準備が整っています。AI

ジャパニアス株式会社
品川開発センター センター長
木村 俊之氏 Kimura Toshiyuki